
黒の糸口

リキュール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の糸口

【Nコード】

N6317H

【作者名】

リキユール

【あらすじ】

2月のある休日にとある事件がきっかけで黒の組織壊滅の糸口が。果たしてコナンは組織を壊滅に導くことはできるのか

File 00 発端 (Prologue) (前書き)

処女作ゆえに本来凝るべき組織とのバトル編ですが、浅いです。繋がりが悪いこともたくさんありますがよろしくお願いします

File 00 発端 (Prologue)

冬ももうすぐ明けようかという2月の昼間

つといても寒さは厳しく
とても重ね着無しには出かけられない

「じゃあお父さん、コナン君。留守番お願いね」

「うん」

そういつて蘭は園子と渋谷へ出掛けた

小五郎は相変わらず沖野ヨーコの録画ビデオに目を奪われている

（あゝ暇だ。もうすぐバレンタインだってのによぉ）

コナンの・・・いや、新一の歎きは誰にも聞かれることはなかった

相変わらず黒の組織の情報は入ってこず

ここ最近は何事もなく平凡な日々を過ごしていた

（ま、平和に勝ることはないし、善しとしとくか）

コナンは胸の内ですさやいた

「おじさん、僕今から元太たちと遊んでくるね」

「おー行け行け！あんまり遅くなるんじゃないぞ」

はいと返事をして階段を降りた

とは言ったものの歩美や元太、光彦は今日はおそらくスピリッツの新シーズン新体制発表会に行つてて留守・・・

となると他に行く先は

・阿笠邸

「あー探偵さん？元氣ないみたいね？」

「うっせえ」

「まさか『何か事件起きねえかな？』なんて思ってないでしょうね？」

「思ってねーよ。それより博士は？」

「博士なら・・・」

「おー新一！来とったのか」

「休みになると、どうも暇でな」

「まあ、平和でなによりじゃわい」

そういつて博士はおもむろにテレビをつける

ちょうどニュースをやっているところだった

“昨日夕方、鳥矢町のビルで銃で撃たれた男性の遺体が発見されました

亡くなったのは柳原幸也さん41歳”

「鳥矢町といえば、君が前に組織のメンバーとやり合った町じゃないのかい？」

「あー。ま、そのおかげで水無さんを組織の情報が少しは手に入るはずなんだけど、最近ぱったり」

「まあ、そう腐るでない。じきに得られるよ」

“なお、この会社の社長の舵勝則さんは拳銃密輸の容疑がかかっており、内部告発を口封じする犯行の可能性もあるとして警察では引き続き捜査が続いています”

- 都内・高速

「ウオッカ。DMFの行方はつかめたのか？」

ジンが問い掛ける

「今、調べてますがまだなんとも。ただDMFの下っ端が一人・・・」

「フン、どうせサツの連中は今頃DMFが口封じで殺ったで捜査してるころだ。心配はいらねえな」

そういつてジンは煙草に火をつけて笑みを浮かべた

File 01 手掛かり

特にすることもなく、ただ博士の家で寝転がるコナン

「しかし、ツイてないのぉ」

「あぁん？」

「君だけスピリッツの新体制発表会の招待状が外れるなんて」

「んなことかよ！別にいいんだよ！」

ブー！ブー！

コナンの携帯が鳴る

「はい、もしもし」

相手はジョディ先生だった

「今、大丈夫？」

「うん、今博士の家だから」

「そう、それならいいわ。実はさっき水無怜奈から連絡が入って」

電話の内容は
組織に潜入した水無怜奈が組織の暗殺計画を聞き付け、FBIに報告したものだっ

「彼女自身はこの計画に参加してなくて、標的はDMFと呼ばれているくらいしか」

「ありがと、なんかわかったら連絡するね」

そういつてコナンは電話を切った

「どうかしたのか？」

コナンは笑みを浮かべながら組織の尻尾を掴めそうだと伝える

「でい、DMF？」

「そう、それが今回の奴らの標的ってわけだ」

「DMFといえばN・N-ジメチルホルムアミドだけど」

さすが組織の科学者だけあつて細かい知識を知っている

「前のD」みたくは行かないみてーだな」

「もしかして何かの頭文字じゃないのかい？ほれ、よくDVとかいうじゃないか」

（頭文字・・・かあ）

コナンはそういつて考え込む

「そろそろ、チャンネル回していいかしら？
もうすぐ日売テレビでビッグ大阪の新体制発表会のニュースあるん
だけど」

「あ、ああ。」

（ニュース・・・新体制・・・）

「そういえば、元太君が言っておったのお。今年のスピリッツに現
役のブラジル代表のミッドフィルダーが来るって」

（ミッドフィルダー・・・！）

「博士！ちょっと調べてほしいことが」

「へっ？」

コナンは博士にさっきのニュースを調べさせた

「ほれ、後は君一人でも」

「ああ、サンキュー博士」

コナンはニュースを隅々まで読んだ

どうやら何かを探しているらしい

（ん？写真？）

力チ

写ったのは会社の旅行での一枚と思われる写真

社長を中心に10数人が写っている

（あれ？この社長、どこかで・・・）

引っ掛かりはしたが、社長の名前を見て
コナンは急いでジョディに電話をかける

File 02 標的特定（前書き）

オリジナル設定あります

File 02 標的特定

都内某所

ジョディは車を飛ばしながら先ほどの水無怜奈との会話を思い出していた

『あ、私。水無怜奈。組織が動き出したわ。どうやら誰かを殺すつもりよ。標的はDMF。暗殺場所なんかはわかり次第』

・・・ピリリリリリ

携帯が鳴り出したため、ジョディは車を路肩に止める

「はい、こちらジョディ」

『あ、ジョディ先生？』

「あら、コナン君。ずいぶん早いけど、何かわかった？」

- 阿笠邸

「ああ。奴らが狙うDMFの正体がね」

『ホントに！？誰なの？』

「昨日夕方に殺された柳原幸也の勤める会社の社長、舵勝則！」

『舵って、今拳銃密輸で警察に身柄を終われてるあの舵？』

「ああ、奴らが言ってたDMF。これだけじゃ何かわからないけど、DMFがそれぞれ頭文字になってるんだ。そして、サッカーでDMFといえば」

D e f e n s i v e M i d F i e l d e r

守備的中盤を意味するが

サッカーではこのポジションを別名で呼ぶ

“ ボランチ (V o l a n t e) ”

ボランチはポルトガル語で船の舵取りを意味する

『つまり、舵勝則の可能性が高いつてわけね』

「そういうこと」

『じゃあ舵を奴らより先に見つけて、組織の情報を』

この時、コナンはふいに何かを感じた

なんで組織が舵を狙うのか理由がわからなかった

『ちよつと？コナン君？』

「あ、うん。任せるよ」

ジヨディは電話を切るとすぐに舵確保の手を回した

一方、コナンは何かにつ掛かったままだった

「しかし、なぜ奴らは彼を狙うんじやろうな？」

「それに、あの社長・・・」

・都内某所

舵殺害計画のために組織はある倉庫に集まっていた

「DMFはおそらくまだ鳥矢町の近くにいるが、明日には杯戸町の奴のこしらえた隠れ家に行くはずだ」

「そんな情報どこで」

「バーボンが調べあげた。俺とウォツカは近くで偵察。ベルモットは奴に道を聞くフリでもして気を引け。奴を仕留めるのは・・・お前に任せた、ネグローニ」

ネグローニと呼ばれた外国人風の男は無言で答えた

それを倉庫の影から不敵な笑みを浮かべながら見つめる人影に誰も
気付いてはいない

File 03 隠れた罫（前書き）

原作が8月5日現在、バーボンの正体など伏線が残されていて、展開によってはまったく違う話になるかもしれませんがあしからず（笑）

File 03 隠れた罠

ジョディはFBIのジェームズに連絡を入れ、すぐに標的の舵勝則の確保を要求した

ジェームズはすぐに捜査員を数名おくりこんだ

一方、時刻は4時を回り、辺りは早くも薄暗くなってきた

「とりあえず、俺は一旦家に戻るから」

「気をつけてな、無理をせんよおに」

「わあってるって!・・・」

コナンはふと工藤邸を見ると、いつもは開いているカーテンが閉まっていた

(・・・)

「新一？」

「なんでもねーよ、博士はちゃんと戸締まりしといてくれりゃいいからよ？」

その夜、FBIは米花ホテルに集められ、そこに捜査本部が設けられた

「舵の行方はまだ掴めないのか？」

「ええ。まだ連絡はありません」

その時、突然彼等の後ろから子供の声

「多分、その人は明日杯戸町に姿を見せると思うよ。それも、隠れ家にね」

その声に捜査官たちが全員振り向く

「こっコナン君!？」

「コナン君、どういうことだい？」

「連絡があつたんだよ・・・知り合いからね」

「知り合いて・・・そんな人があるはずが」

- 鳥矢町

組織とFBIの話題の渦中の舵勝則は、住宅街の影に身をひそめていた

舵は焦っていた

拳銃の密輸が噂されていた矢先に

以前から密輸に協力していた部下が何者かに射殺された

当然警察は自分を疑い、今じゃ完全に四面楚歌

確かに密輸はしていたのだから容疑は決まっているが

ここで捕まれば、奴らに・・・

そう思うと、舵は杯戸の隠れ家に隠した大金を手に高跳びを考えた

しかし、この鳥矢町は今警察の包囲網の中

むやみには動けない

・再び捜査本部

「そ、そんな知り合い、いるはずが」

捜査官たちはやや動揺のいろを見せていた

「みんなもよく知ってる人・・・だと思っよ」

「と、とにかくコナン君が信頼する人物だ。今から捜査員を向かわ

せよう
「

「なら、私も」

「いや、ジョディくんはここで指示をおくつてくれ」

「わかりました。もし、これで奴らより先に舵を捕まえば」

「ああ、少なくとも何らかの手掛かりを得られるはずだよ。舵は調べた結果、取引をしたこともあるからね」

（取引？・・・）

コナンはまだこの社長を思い出せないでいるようだった

File 04 銀を装弾

時刻は夕方6時

この時期はこの時間になれば辺りは真っ暗である

蘭は園子と別れ、一人帰路を歩いていた

（嫌だな・・・何にも出ないといいけど）

普段は空手で都大会を制するほどの強さを見せるが

昔から幽霊などは苦手で
どうしても恐れをなしてしまう

何もなければいい・・・

そう思いながら歩いていた

そのとき、見覚えのある人が歩くのが見えた

（今のって？）

しかし、こちらには当然気付かず、通り過ぎてしまう

走って声をかけようとするが

次の瞬間にはその姿を見失ってしまう

（おかしいなあ・・・）

そう思いながらも蘭は再び帰路に着いた

「・・・」

・毛利家

「え？ 昴さんを見た？」

「多分ね。でもすぐ消えちゃった」

「あ、そうなんだ」

「おい、蘭！ 酒はまだかあ？」

二人のお寒い視線を全く気にしない小五郎であった

・翌日、朝6時

コナンは早めに起きてこっそり家を抜け出す

しばらく歩いたところで声をかけられた

「時間通りだな」

「早かったね、昴さん。いやここは赤井さんって読んだほうがいいかな？」

「ふ、そうだな。だが、ジョディたちにはまだ俺は死んだことにしておいたほうがいいだろう」

「もちろんそのつもりだけどね」

「さて、車はキャメルが用意したし行こうか？奴らが狙ってるであろうDMFさんの元へ」

File 04 銀を装弾（後書き）

蘭を登場させましたが、特にここでは意味はありません（笑）

File 05 確保

杯戸町は穏やかな朝を迎えていた
今日は月曜日。通学する高校生や通勤する会社員が町を雑踏するま
でまだ時間があった

沖矢という架空人物に扮した赤井秀一とその部下であるキャメルの
運転するワゴンで杯戸に向かうコナン

何か考え事をしているようだ

(やっぱりあの社長・・・どこかで)

「しかし、赤井さん。一体どうやって舵勝則の情報を？」

キヤメルの問いに赤井はすらすらと答えた

「舵のことを調べるのは造作もなかった。

組織に再び潜り込むのは危険を伴ったが、奴らは動ける探り屋を探していた。

そこに水無怜奈の紹介で沖矢昴として再び潜り込み

奴らの計画をこっそり聞き耳をたてただけさ。

まあもう一人の仲間が今頃奴らのところに行って始末してくれてるだろうがな」

「そして、昨日。やつらが舵勝則の隠れ家を特定して計画を立てた。でも、その隠れ家は」

- 杯戸町

ポルシェに乗り、辺りに注意を払うジンとウォッカ

そして、車の近くには日本人に変装したベルモット

ジンに直接任命されたネグローニと呼ばれた男は携帯を片手に少し離れた地点で連絡を待っているようだ

時刻は6時30分

普通、心理的に人気を避けると踏み
昨晚から臨戦体制で臨みながら
奴らの標的は現れない

「・・・」

「兄貴、奴はまだ来ませんね」

(・・・ん?)

ジンは視界に何かを捕らえた

(なんだ?)

そしてネグローニが動く

次の瞬間、フロントガラスが割れ、ジンの左肩に弾が当たる

「あつ兄貴!」

(そうか・・・そういうことか・・・!)

「ウォッカ！運転変われ！ベルモット！ずらかるぞ！」

・杯戸町2丁目、空き家

（どうやらうまく逃げたようだ。これでは高跳びするだけだ）

「フッフッフッフ」

「ねえ？」

その声に舵は死ぬほど驚かされた

もう追っ手に見つかるとはないと高を括っていたようだ

「おじさん、何してるの？」

「！！」

舵は驚きながらも手探りで何かを捜す

「おじさん、昨日からテレビに出てる悪いおじさん、だよな？」

その時、舵はようやく拳銃を手にとり、構えた

「ボウヤ。大人しくするんだ。さもなくては痛い目に」

『そいつはもう使いものにならんだろう』

舵は再び衝撃にかられた

そこには赤井とキャメルが知らぬうちに立っていた

「こっちもあまり派手なことはいたくない。日本警察に身柄を渡す前に、2、3質問に答えてもらおうか？」

赤井の言葉に舵は銃を手から話し、静かに頷いた

File 05 確保（後書き）

この小説の設定では、バーボンⅡ沖矢Ⅱ赤井。ネグローニは赤井の部下という。ちよつと無理のある設定にしました。バーボンは情報収集に優れた組員らしいので、おそらくジンたちも信頼するでしょう。ネグローニが頭角を表すまでの道程は今思案中です（笑）赤井がFBIとばれてしばらくしてから組織の一員になった設定です。ネグローニは一応暗殺の腕はプロ級で一目置かれていても考えてください

File 06 明るみになる正体

一方、不意の襲撃を受けたジンは無表情ながらも

そのオーラは殺気に満ちており運転するウォツカですら寒気を感じていた

（バーボン、ネグローニは鼠か・・・）

「あ、兄貴。大丈夫ですかい？だいぶ血が出てますが」

「気にするな、今はこの場から離れることが先決。DMFは恐らくFBIの手に落ちた」

「どっどっいついことですかい？」

「キールを殺れと他の奴らに伝える！
方法はなんでもいい。あの女はFBIに手を貸す犬とわかった以上、
生かしてはおけない！！」

（あ、兄貴・・・）

- 杯戸町2丁目

両手を縄で縛っている最中、FBI捜査官がこの空き家进行搜索にきた

しかし、コナンとキャメル、そして見知らぬ青年が既に目標の人物
を確保していることに驚いていた

そしてキャメルの運転する車で米花ホテルに送られた

・ホテル一室

「でかしたぞ！キャメルくん！コナンくん、そして・・・えーっ
と？」

「私ですよ、ボス」

コナンが止めようとしたのも遅く
沖矢に変装したまま、赤井秀一口調でしゃべってしまう

「あつ赤井くん？」

「シュウ！？」

室内の捜査員全員が驚いた

「私としたことが・・・この男を確保して少し気が抜けたようだ」

そういつて赤井は変装をといっていく

ジヨデイの歓喜の怒号は赤井の言葉に打ち止められた

「さて、問題はこの男」

「・・・」

コナンはまだこの男を思い出せずにいた

「今から質問をする。もう正直に話してくれるかな？」

確保された舵は無気力に返事をした

「まずは、拳銃の密輸ルートは」

舵は素直に答えを返した

「ジョディ！すぐに調べろ」

「了解」

「二つ目、お前の部下が一人殺されたが、あれはお前の仕業か？」

「あれは私じゃない！誰かがスナイプしたんだ！」

コナンは声を聞き、さらに悩む

（どこだ？どこでこいつと）

「最後の質問。数カ月前、トロピカルランドで取引した組織のことは何か知っているか？」

（……！）

コナンは吃驚して、舵を見た

（間違いない。あの時の男だ）

あの時、工藤新一が組織に毒薬を飲まされたとき

組織と取引をしていた、あの男

「あ、ああ。奴らは犯罪の天才ばかりだ。あの日の密輸以来、何度か交渉してね」

このあと、舵はしばらく奴らのことを話した

「奴らとはどこで交渉した？」

「最近は何花町が多かったな・・・何でも酒を探してるみたいだった。シェリーだったかな？」

口を閉ざしていたコナンが久しぶりに口を開く

「奴らの・・・奴らのボスはどこにいる？」

舵は子供の質問に困惑したが
赤井の睨みに耐え切れず
フツと息を吐いた

「命を・・・命を保証してくれるんだろうな？」

「刑務所に入れば命の保証はあるだろう」

「さあ、答えろ」

もはやその姿は小学生、江戸川コナンではなかった

F i l e 0 6 明るみになる正体（後書き）

舵の部下柳原を撃ったのはキャンティかコルンでしょう。トロピカルランドの件を知っているのは、赤井がバーボンとして調べたことにしておいてください（笑）

File 07 闇の酒

舵は自分の知っている全てを話した

「奴らに一度だけ聞いたことがあるんだ」

- 米花町（舵の回想）

『きつ君たちのボスは一体どこにいるんだい？』

『・・・』

『ほら、私はこんなにその人によくしてもらっているだろう？ 礼を言いたくてね』

『フッ思ってもねえことを』

『えっ?』

『まあ、貴様の言葉は俺がすぐに伝えておく』

ピポパピ

(回想戻る)

「それ!七つの子のメロディじゃなかった?」

「ん?・・・言われてみればそんな気が・・・?」

「七つの子?ボウヤ、それは何のことだ?」

赤井の質問に耳を貸さず、コナンは続けた

「そっそれで？」

「しばらくして奴の携帯に電話がかかってきてね。そういえば、その時もワインとか言ってたな」

（ワイン・・・それがボスのコードネームか？）

「もう知ってることは全て話した。後は警察でもどこでも連れていってくれ」

そのあと、舵はFBIに護衛されながら警察に連れていかれた

- ホテル廊下

赤井とコナンは並んで歩き、エレベーターに乗った

考え込むコナンに赤井が問い掛ける

「まさに探偵だな、ボウヤ」

アハハハと笑うコナンに赤井は告げる

「いや、高校生探偵、工藤新一と呼ぶべきかな？」

コナンは少し驚いたがすぐに平静を取り戻した

「いつから？」

「君は我々の前では自分の正体をばらす言動ばかりだ。」

小学生があんな組織と戦おうとするはずがない」

「それだけ？」

「さつき、あの男に聞いた最後の質問の件に関連するが
あの日、ある小学生が頭から出血したまま脱走したそうだが
君の写真を見せると、警備員は頷いていたよ。
そしてその日から工藤新一が姿を見せていない。
こんな偶然はない。君は組織の毒薬が何かで体が縮んでしまったの
だろう」

赤井の推理に間違いはなかった

「奴らは絶対に潰さねえといけねえんだ。平和のため、俺のため、
そして・・・」

「とりあえず、しばらくは無駄に事件に首を突っ込まないことだ
な
ずる休みもほどほどにな」

ピリリリリリ・・・

赤井の携帯が鳴る

「私だ。・・・そうか、逃げられたか。まあいい。
奴らの尻尾は大分見えてきた。

今から例の場所に10時で落ち合おう。

水無怜奈にもそう伝えてくれ」

電話を切ると、赤井は“じゃあ”と言って去っていった

File 08 破滅の誓い

特にすることがなくなったコナンはそのまま帰宅したが
案の定、ずる休みが小五郎にばれて大目玉を喰らう

そのあとは部屋に戻り、メールを打った

送り終わると睡魔に襲われ、そのまましばらく眠った

コナンくん？コナンくん！？

「あれ？蘭姉ちゃん？」

「あれ？じゃないわよ！今日どこ行ってたの！？心配したんだから
！」

小学生らしく謝ったところでどうやら留守番のお願いらしい

（組織から離れるとこんなに平和なのにな）

そう思った

そして再び誓った。奴らを必ず潰すとこの日の晩のニュースで舵勝則逮捕の一報が世間に流れた

舵は1年以上前から拳銃の密輸に手を染め

部下の柳原に売りさばかせていたことを認めた

しかし、FBIのときと同様に柳原殺害は認めなかった

それを見ながら食事をしていたコナン、蘭、小五郎

「拳銃なんて密輸して何に使ってんだ」

「怖いよね。しかもこの人ちょっとは有名人だし」

“なお、舵容疑者は密輸フィルム隠滅のためにトロピカルランドで接触したとされる組織との関係については黙秘している模様”

コナンは内心ドキッとしたが、平静を装った

しかし、蘭は平静ではなかったことにすぐに気付いた

その夜、蘭は眠れず考えていた

（もしかしたら新一は・・・？）

その時、携帯が光った

（でっ 電話！？）

「もっ もしもし？」

よおー 蘭！

いつものように話し掛ける

もちろん変声機を使った偽の声である

「新一？こんな時間にど……」

『どーせさっきのニュースで俺があのおっさんの事件に巻き込まれたんじゃないか？とか心配してんだろ？』

「誰もあんたの心配なんかしないわよ！」

『その反応は凶星だな！心配すんな！今関わってる事件解決したらすぐそっちに帰るからよ？』

「う……うん」

『んなシケた声出してんじゃねーよ。じゃあ、また今度な』

そついうと先に切ってしまった

（……新一、信じていいんだよね？）

そつ思い直すと蘭は目を閉じた

File 09 思惑

都内某所

銃撃をうけ、左肩を負傷したジンだが、治療を受け、回復した

（キール・・・）

「兄貴、全員揃いやしたぜ！」

そこにはベルモット、キャンティ、コルンが既に集められてきた

「ジン、キールを殺るのかい？」

「鼠に用はない。消せ、今日中にだ」

「キール、ウラギッタ。オレ、ヤリタイ」

「蜂の巣にしても殺れ。あの方にも許可はとってある」

「ジン、なんか焦ってない？いつもは冷静なあなたが」

「フツ、今回はFBIの連中にまんまとやられた
次ミスを犯せば俺も命はないだろう
もう手を抜いていられる状況ではないってことだ
まあ俺が死んでもいいやつは手を抜けばいいさ
だが、そんなやつはいないだろう
やることをやればいい」

- 来葉峠

サングラスとキャップで顔を隠した黒ずくめの二人組は何やら話している

そこに一台の車が止まった
降りてきたのは沖矢

恐らくここに来るまでまだ変装し直したのだろう

「二人ともご苦労だった」

女のほうは水無怜奈

組織に潜入しているCIA諜報員だ

「でも、これで組織にはいらなくなつた。これからどうするの?」

「そのことだが

あんたはしばらく報告がてらアメリカへ隠れてほしい

奴らは裏切り者のお前を殺す計画を立てているだろうし
国内ではすぐに見つかってしまう

幸い、まだ追っ手もないようだしな」

すると男が

「では私はどうすれば？」

と聞いた

赤井

「しばらく姿を見せないほうがいいだろう。ボスの指示を仰いでくれ」

「じゃあ私は今からでもアメリカへ」

翌日

コナンは通常通りの生活に戻った

「コナンくん」

と元気のいい3人と無表情の計4人がかけてきた

彼らは歩美、元太、光彦。そして灰原哀

「ねえ？どうして昨日お休みしたの？」

「風邪でもひいたんですか？」

「ズルじゃねえだろーな！？」

相変わらずの3人に手を焼きながら

コナンはいつも通り登校する

「昨日、何があったか知らないけど、あなたまた無茶してるんじゃないでしょうね？」

「別に無茶なんかしてねーよ。昨日はちょっと体調が」

「それ、ごまかしてるつもり？」

灰原の言葉にため息をついた

その日は昨日の組織の情報のこととは忘れ

退屈な授業を普段通りこなした

File 10 偽善（前書き）

強引な話になってますがそれでもいいならどうぞ

File 10 偽善

学校から帰るとすぐに電話がかかってくる

「もしもし？」

おー工藤か？

と聞き覚えのあるハイテンションな声

「切るぞ？」

「あ、待たんかい！」

西の名探偵、服部平次だ

「なんだよ？何かあんなら早く」

「昨日捕まった社長の舵っていうおっちゃんのことやがな」

「お前、なんか知ってんのか！？」

「ああ。あのおっちゃんやけど、
大阪に薬品会社経営しとったんや。
せやけど、この前社員が非法薬品を取引しとんのが見つかってし
もて、
会社は潰れたんやけど、その社員が言うところらしいわ」

「・・・」

「取引成立せんかったら奴らに殺される”ってな」

「そつそれで」

「その舵っていうおっちゃんが東京におるし、裁判は東京ですることなつて、護送されたんや。

ほんで東京で引き渡されたんやけど、護送したパトカー降りてしばらくして

・・・急に気が狂ったように暴れ出したらしいねん」

「まさか禁断症状？」

「それがちゃうんや。なんでも刑事が携帯いじってる最中に狂い出したらしいで」

（なっなんだと！？）

「ほんでその社員は刑務所で自殺したっちゅうわけや」

「・・・」

「工藤・・・もしかしたらお前の追つとる組織の仲間が」

「とりあえず、俺が探りを入れとくから、またなんかあったら、連絡してくれ」

そういつてコナンは電話を切った

平次が向こうで不満を漏らしたのは言うまでもない

- 都内

ジンは連絡を待っていた

裏切り者のキールを捕らえたという連絡を

しかし、入ってきたのは思わぬ連絡だった

「・・・そうですか。わかりました、ボス」

一度電話を切るとすぐに構成員に連絡を入れた

「軽井沢だ、急げ」

- 米花ホテル一室

組織に潜入し、ジンに重傷を負わせたFBI捜査官をジェームズが
称えているときだった

ジヨディの携帯が鳴り響く

「はい、こちらジヨディ」

『あ、僕だよ』

声の主はコナンのようだ

「あら、何かしら？」

『舵勝則が大阪の薬品会社を経営してたときの部下が警察に捕まっただけ、
自殺したらしいんだ。それで護送のときに近くにいた刑事さんを調べてほしいんだ』

「わかったけど、なんで？」

『もしかしたら、奴らのボスは警察関係者かもしれないってことだよ』

File 11 組織の臭い

- 警視庁・取調室

「じゃあ、あんたがやったんじゃないんだな？」

「だからなんとも言ってるでしょ？」

コンコン

とドアをノックして刑事が入ってくる

「あ、ご苦労様です」

「どうですか？」

「まだ何か隠してると思うんですが」

「私が変わろう。君は一服入れてきなさい」

刑事Aはその言葉で部屋を後にする

「あの、私の取調室はまだ続くのでしょうか？」

「もう終わりですよ」

舵がほつとしたのもつかの間、刑事の言葉に舵は度肝を抜かれる

「お前にはこれ以上、我々組織のことをしゃべられては困るのだよ？」

場所は変わって、毛利探偵事務所

ジョディに調査を依頼したコナンはまた考え事をしていた

(・・・)

一方組織のメンバーはある場所に集合していた

しかし、キール殺害を中止にしたことにキャンティらは不満を口にした

ジンはそれを落ち着かせ、あの方からの言葉を伝えた

「久しぶりに直接お会いになれるんだ。今は黙って待ってる」

・毛利探偵事務所
コナンの携帯が鳴る

「もしもし？」

『わかったわよ、コナンくん。居合わせた刑事』

「それで、誰なの？その刑事」

『携帯を触っていた刑事は、
・・・警視庁刑事部捜査第一課強行犯捜査3系の高木渉巡查部長』

コナンは驚きを隠せなかった

コナンはすぐに電話を切り、警視庁に電話を掛けた

（まさか・・・まさか！）

ブルルルルル

「はい、警視庁。おーコナン君か？・・・え？高木？・・・ちよつと待ってくれ」

おゝい？高木はどこだ？

と目暮が言つと

佐藤が「高木くんなら今取調室室じゃ?」という

「ああそうか。すまんね、コナン君。また後でかけ直し」

そこまでいった直後、『おー高木くん!君に電話だ』

という声がして、すぐに高木が電話に出る

「はい、高木ですが?」

『ねえ、高木刑事、前に刑務所で自殺した人いたじゃない?』

「自殺?・・・ああ急に叫び出したあの人が。それがどうしたの?」

『その時、携帯触らなかった？』

・毛利探偵事務所・自宅

「ねえ？どうなの」

『ああ、電話だよ。田舎から久々に電話掛かってきてたから。それで間違えて発信ボタン押しちゃってね』

「ホントにそれだけ？」

『やだな。それだけに決まってるじゃないか』

コナンは少しほっとしながらも落胆していた

『そうそう！プッシュ音がメールアドレスに似てるんだよね、あの
人』

コナンの目の色が変わった

ちょうどその頃、舵は取調を終えて刑務所に拘置されていた

連れ添った刑事に舵はひどく怯えていた

中に入ると、刑事は舵の首を締め上げ、舵を殺害

舵の着ている服を結び、自殺に見せかける擬装工作を始めた

F i l e 1 1 組織の臭い（後書き）

全てはこの小説内だけの設定です

File 12 背中が見えた

「そうそう！プッシュ音がメールアドレスに似てるんだよね、あの
人」と

コナンは驚きを隠せない

『だっ誰のアドレスなの？』

その時、刑事が慌てて走ってきて大声を出した

「大変です！舵勝則が自殺しました！！」

この声に掻き消されたがコナンはなんとか聞き分けた

そして、高木に礼をいって電話を切り、不敵な笑みを浮かべた

（やって見つけたぜ・・・奴らのボスを！）

一方捜査一課では舵の自殺で大騒ぎ

どこから嗅ぎ付けたのかマスコミが入口にたむろしていた

「ちょっと、どっから漏れたのよ！情報は？」

その刑事たちの対応を横目にこっそり警視庁を抜け出す男

男は車に乗ると携帯で誰かに電話を掛けた

「私だ、今からそっちに向かう。全員揃って待っていないさい。わか

ったかい?・・・ジン」

男はどうかやら組織の関係者らしい・・・

警視庁には多くのマスコミに対応しきれず

身動きの取れない状態

「えーい、誰か対応できるものはおらんのか?」

「ダメです!我々はまだほとんど状況を・・・」

するとある刑事が「あの一。白鳥警部なら対応できるかも?」という

「おーそれは朗報だ。すぐに彼を呼んでくれ」

「わかりました」

・米花ホテル一室

赤井、ジョディ、ジエームズらFBI捜査官は今後の策を練っていた
そこにコナンが合流する

「じゃあ、コナン君、話してくれ」

コナンは高木との電話の後、再びジョディに連絡を入れていた

「組織のボスを特定する鍵を手にした」

「まずは少し前に僕が奴らの仲間、ベルモットに人質にされたとき、あいつはメールを読んでこうつぶやいた」

『OK・・・ボス』

「それからある童謡に聞こえるメールアドレスに返信してたんだ」

「それが、この前君が舵に聞いていた七つの子だというわけか」

赤井は腕を組んだまま無言で聞いている

「舵が大阪に経営してた会社の部下が麻薬で捕まったんだ
その薬の取引相手はおそらく組織のメンバー。しかもそれはジンカ
ベルモット

メールアドレスを知っているのは奴らくらいだろうしね

その舵の部下を裁判をするために東京に護送したんだけど
東京に迎えにきた刑事さんは鳥取出身。

奴らのボスのアドレスは鳥取の市外局番になってるんだけど、
偶然刑事さんが電話をかけちゃって。

多分、それでその部下は“奴らの追っ手がきた”と思った。
それで刑務所で自殺したんだ

その電話をかけた刑事さんは関係ないんだけど、
知り合いに同じようなプッシュ音のアドレスを設定している人を知
っていた・・・」

「それが、奴ら組織のボスの可能性が高いってわけね」

「しかし、ボウヤ、そいつらのボスなら携帯を使い分けると考えた
ほうが賢明じゃないか？
いつ人に見られるやもしれないのに」

ピリリリリリ

コナンの携帯が鳴る

「もしもし？」

『あ、コナン君？実は君の言ったとおり、いなくなっているんだ』

ありがと・・・といって電話を切った

「フッ、どうやらボウヤの推測が当たりのようだね」

「これでは決まりだよ。」

File 13 解毒剤

組織のボスのアドレスやその他の情報から

コナンたちは組織のボスを特定

作戦を練った

「俺の仲間がジンに傷を負わせた
奴が動けるようになるまで3日はかかるだろう」

「13日の金曜日か・・・嫌な日付だ」

「先に攻め込んで不意打ちにするのは」

「どこに潜んでいるかわからぬ相手に自殺しにきましたと言っているようなものではないか」

「それに、アジトは多分」

ピリリリリリリ

「まったく今度は誰かと思えば」

（灰原あ？）

「へいへいなんだよ？」

- 阿笠邸

「あなたに朗報よ。やっとほぼ完全なAPTX4869の解毒剤が完成したわ。
試すんだったら今日中にあなたのとこの彼女にうまい言い訳を考え
ときなさい
ただし、死んでも責任はとらないわよ」

一方的にそう告げると
灰原は電話を切った

「どうかしたの？」

「あ、あー僕用事思い出しちゃった。
だから後は赤井さんに任せるよ。
多分、赤井さんもアジトのめどはたってるだろうし」

居合わせた捜査官は啞然としたが
そついうとコナンは部屋を後にする

そして博士の家に走った

感情は表には出さないが破裂寸前だ

しかし、角を曲がったとき、予想外の出来事が

それは工藤新一の家の前に蘭が悲しげな表情で立っていたことだった

しかし今、コナンの姿で顔は会わせられない・・・

角に隠れて、コナンはこれが最後になるかもしれない電話をかけた。
・
・

『もしもし?』

「あ、蘭か?俺だ」

『新一……』

「まーあたシケた声出してやがるな」

『今、新一の家の前にいるんだ』

「あゝ、そういえば。沖矢昴さん。昨日連絡があつて、その家出たから」

『えっ？そつなの？』

「まあ俺の都合もあるし、あの人も新しいマンション見つけたみてーなことだったし」

『俺の都合？』

「今関わってる事件が解決したら、蘭。
俺はそこに戻るからよ？あんな人の家の前立ってるとストーカーと
間違われるぞ？」

『ホント！？戻ってくるの？』

「まあそれが明日なのか1ヶ月先かはわかんねえけど、
3年が始まる前には必ず戻ってやるから、それまで待ってる。じゃ
そういうことで」

蘭が何か言ったが、それより先に電話を切った

しばらくすると蘭はその場から去っていった

- 阿笠邸

「は？あ？まだ使わせないだとお！？」

コナンの声は近隣にまで響いた

「あなたね・・・組織が壊滅してないのに工藤新一に戻ってごらんなさい？」

奴らはすぐに彼女を始め、全ての人間を消しにかかるわ。
それにまだあなたとこの彼女への言い訳を聞いてないわ。
どんな事件だったか。江戸川コナンの正体」

「組織の壊滅への道、その始まりは13日の金曜日」

「ちょっと！それどういこと！？」

「掴んだんだよ。奴らの壊滅の糸口をな」

「それワナじゃないでしょうね？」

「大丈夫だよ・・・FBIにもちゃんと言ってるし
それに・・・奴等のボスは・・・さんなんだから」

灰原はその名前に驚愕し、すぐに反対した

「やめなさい！相手が悪すぎるわ！
それに彼はあなたの今の姿を知っているのよ！
もし今回逃げられたらどうするつもり！？？」

コナンは少しうつむいてつぶやいた

「もう・・・終わりにしてえんだよ
あいつの悲しい顔は見たくねえんだ・・・
それに俺の中ではこれがラストチャンスとしか思えないんだ
今回ダメなら俺は確実に殺される
でもそれなら今勝負の時じゃないかと思ってる
大丈夫だ、俺は探偵なんだぜ？」

- 軽井沢

「ご苦労様だったね。わざわざ集まってもらって」

「ボス・・・」

「さっそくだが、組織の情報が漏れたようだ。それも、小学生にね」

「・・・」

「米花町の毛利探偵事務所に住んでいる、江戸川コナン。これが今回のターゲット」

(!!)

ベルモットは恐れていたことが現実になり、一瞬驚く

「ボス、この情報はどこで？」

「私は警察だ。それに以前からこの少年は我々組織のことを探っていたようなんでね」

「そういや、このガキ。前に毛利小五郎を殺ろうとしたときに邪魔してきたね」

「オレ、アタマガイイ」

「キャンティ、コルン。好きなだけ打て。
警察から無意識とはいえ私のことを流した刑事は私が後で始末しておきますよ。」

まあ携帯を使い分けていない私にも問題がありましたかね」

「っで、いつやるの？」

「13日の金曜日。とても素敵な日になりそうじゃないか」

「ボス、作戦を」

「明日、一度アジトに帰りましょう
決戦はここでFBIとグルの江戸川コナンを暗殺し、赤井秀一も殺
す。シンプルでしょ？」

「なら、あたしはアジトの入り口で赤井を仕留めるわ」

「そうしてください。私はいつもの場所から見ていますので」

File 13 解毒剤（後書き）

アジトがなぜ見つけたのかなどはスルーしてください

File 14 名探偵復活（前書き）

ややキャラ設定が変わってしまったところもありますが気にしないでください（笑）

File 14 名探偵復活

- 米花ホテル一室

アジトのありかを説明したあと
赤井は自身の推理を捜査官に話し始める

「奴らは我々より先に、メガネのボウヤを狙うはずですが
恐らく奴らのボスは情報が漏れ、それを聞き出しているのが小学生
それもあのボウヤだと気付いているはずですが
なんとしても、あの民間人の少年は守らないといけない
しかし、警察にボスがいた以上、今は警察には彼の保護は頼めない
ならば、我々が守るしかない
奴らの壊滅にはボウヤの力も必要ですしね」

- 阿笠邸

コナンの意志の強さに灰原は押され負け
いよいよ元の工藤新一に戻るときがきた

「これがA P T X 4 8 6 9の解毒剤よ。
今飲むのは勝手だけど

彼女はあなた、江戸川コナンが急に消えたら、悲しむんじゃない？」

コナンはためらった・・・

なんだかんだで蘭や小五郎には長い間世話になってしまった

何も言わずに去ることはできない

「そうだな、母さんに帰って来てもらって引き取ってもらうか。江
戸川コナンを」

その日のうちにコナンは母・友希子に連絡して日本に一時帰国して
もらった

2月11日

祝日の午前に母・有希子が扮した江戸川文代が毛利探偵事務所を訪れる

文代は“長い間、お世話になりました”

と涙ながらに感謝を述べた

さすが元女優・・・たいした演技力だ

コナンは少し毒づいたがしまい込んだ

蘭は涙を流し、別れを悲しみ

小五郎もどこか寂しそうな表情で見送った

そんな二人を見ながらコナンは胸の中で“ごめんな”と呟いた

阿笠博士の家に服を持ち込み
博士や灰原、有希子も心配する中

コナンはトイレで解毒剤を飲んだ

程なく体が熱くなり、自分の手足が伸びるのがわかった

なんとか声を押し殺した

数分で江戸川コナンから工藤新一への復活を遂げた

工藤新一がトイレから出てきた瞬間

灰原は安堵の表情を浮かべ、博士と有希子は大喜び

しかし、新一は程なくして現実を見た

「まだ奴らは潰せてねえし、喜ぶのはそれからだ」

それから新一はジョディに連絡を入れ、事情説明や作戦会議に参加するため

米花ホテルへ向かった

阿笠邸に残された有希子は心配そうにしながらも

博士の“彼に解決できない事件はないんじゃないから、大丈夫じゃよ”と励ます

FBI作戦会議会場となった米花ホテル一室

部屋には赤井やジョーディ他6、7名の捜査官がいた

「君がああボウヤか・・・ソックリだ」

「赤井さん、やめてくださいよ！知ってたくせに」

状況を把握できないジョディたちに新一は簡潔に説明を行なった

組織の完全犯罪を完成させるために作られた毒薬のこと

それを飲まされ体が幼児化したこと

ジョディたちは非現実的な話に呆気に取られてた

「ただ、奴らを倒すにはさっきも言ったように工藤新一の力が必要

になる

じゃあ作戦を立てようか？」

今、組織との最終決戦が幕を開けようとしている

File 15 異例（前書き）

一部小説内では有り得ない設定があります

File 15 異例

黒の組織のアジト

「では確認です。キャンティとコルンは2階入り口を担当。ベルモットは入り口。ジンとウォッカは2階中央付近。位置取りは任せます。各階に50人を配備させること。江戸川コナン殺害が最優先。赤井秀一は次に回しても構いません」

「了解」

「それでは、私は隠し部屋であなたがたの健闘を祈ります」

組織のボスはそのあと、帝丹高校を訪れた

もちろん、変装をしているうえ“息子が在籍している”と嘘をつい

て校舎を回り、ある教室で立ち止まり、不敵にニヤついた

FBI作戦会議室では

赤井と新一を中心にグループが組まれた

さらに、アメリカに身を潜めていたCIAの水無怜奈が赤井からの連絡を受けて

CIAのトップに組織壊滅の情報を伝えると

異例のFBIとCIAのタッグが実現

CIAにスナイパーたちのマンマークなどを要求した

そして、作戦会議が終了した

「君には出会ってから驚かされてばかりだ
さっきの作戦会議の君は私の詮索を凌駕していた」

「いや、赤井さんの計画に少しばかり手を加えただけですよ」

そういうと、赤井は初めて声を上げて笑った

「君のことは今後の人生でも忘れることはないだろう」

そういうと赤井は“では”といってどこかへ歩いていった

新一はまだ家に戻るわけには行かず

米花ホテルに部屋を借りた

2月12日・・・

帝丹小学校では江戸川コナンの電撃転校が担任の小林先生によって
告げられた

「嘘だろっ！？先生」

「冗談なら止してください」

探偵団の2人の男の子は声を荒げたが
先生の表情を見て落胆

コナンを好きだった歩美は机に伏せて声を押し殺しながら泣いた

そんな3人を見て、哀は複雑な心境で声をかけられなかった・・・

その日の休み時間、普段は賑やかで明るい教室も

江戸川コナンという存在が消えたことで静まっていた

「歩美、これからどうしよう・・・」

「コナン君、最後まで得意の抜け駆けでしたね、ハハハハ・・・」

「灰原！オメーなんか聞いてねえのか！？」

「コナン君、どこ言っちゃったの？」

「江戸川君は両親と一緒に外国へ行ったわ」

「どうして止めてくれなかったんですか！」

哀は返事を返せなかった

自然と涙が流れてきていた

（なぜ？なんでわたし泣いてるの？）

光彦が謝る声は灰原の耳には入らなかった

外は降っていた雨が勢いを増していた

File 15 異例（後書き）

FBIとCIAの関係は調べたんですが、よくわからんで協力させました笑。探偵団のは本編に関係ないんですが、灰原はコナンが本当は好きだったというのを入れておきたかったので最初書いたときにはなかったんですが追加しました

File 16 戦闘開始

2月12日、午後9時・・・

組織との決戦を前に最終ミーティングが行われた

そして最後に赤井が締めを任された

「奴らを一人残らず捕まえることが、我々の最大の目的
そのためにも今回は身分や所属等は忘れてほしい

組織の主要メンバーは6人

特に銀髪の長髪の男を押さえれば奴らの動きは鈍くなるはずだ
できるかぎり生きて確保するように

もし俺が奴らに捕まったら構わずに撃つてくれて構わない

最優先は敵の身柄確保

・・・以上だ」

その言葉に全員が緊張の色を浮かべた

今、命懸けのサバイバルゲームがキックオフされるのだ

2月13日 金曜日

捜査官たちは工事が途中で中断した倉庫にひそかに接近していた

倉庫の扉は開いている・・・

中の様子はうつすらしか見えない

「それでは1分後に手榴弾を投げ入れます」

「了解。・・・全捜査官に次ぐ。1分後に手榴弾を投入する。
A班は一気に突入！B班は奴らの動きを封じろ」

『来たようね。ジン？FBIのお出ましみたいよ』

『一網打尽にしる』

「では行きます」

そついつて捜査官は手榴弾を投げた

『ん？』

ヘルモットは手榴弾に気付き、1階にいる仲間に無線で連絡する

『They are coming!（やつらが来たわよ）』

爆発と共に完全防護の捜査官200人が倉庫内に侵入していく

と同時にヘルモットに指示された組織側の戦士がライフルを乱射しながら立ち向かう

赤井は外で待機するジェームズに状況を説明した

やがて赤井の無線に連絡が入り、赤井が倉庫に入る

組織側の戦士の大半は脚を負傷させられ、催涙スプレーで視界を奪

われていた

「赤井さん、ここには奴らの主格はいません」

突入した捜査員から無線に連絡が入る

「そうか・・・」

この時、ベルモットは赤井をひそかに狙っていた

「じゃあそいつらをしばらくあげたらそこに睡眠ガスを巻いといってください」

「手の空いてる人と残りの班の人は着いてきて」

と指示を送る新一を視界に捉え、ベルモットは驚き、少し微笑んだ

2階へは階段を登る

くの字型の階段を登り切る寸前に新一は赤井を狙う奴らの仲間を視界に捉え

FBIに支給された拳銃を発砲した

弾は敵の肩付近を捉えたようだ

と同時に新一は全員にヘルメット着用を要求し、無線で指示を出した

「おそらく入り口付近にはスナイパーが待ち構えてる。特に奴らにはコナンがいないと伝わっている可能性もある。A、B、C班は2階にいったら銃を数発乱射してください。僕が本物のスナイパー2人を探します。見つけたらD班をそちに向かわせてください。スナイパーは赤井さんを狙いにくるはずですから、赤井さんはここから動かないように」

赤井は少しニヤついて捜査官に指示を出した

「行け」

File 17 銃撃戦

赤井の指示と同時に捜査官が階段を駆け上がる

ドアを開けると一気に中へ入っていく

中は巨大なブロックが積まれ

銃撃戦には持ってこいだった

赤井は無線で銃の乱射を指示すると

200人以上の捜査官が敵に当てぬように銃を放つ

組織側の戦士はある程度備えをしていたが

銃の乱射に混乱を起こしていた

さらに、FBIの人数がやたら多いことに気負いしていた

しかし、スナイパー・キャンティとコルンは冷静に標的を狙っていた

『全員怯むな。奴らはあたいらを混乱させるのが狙いのはず
狙いを定めて撃ちまくっちゃいな』

ドンッ！ドンッ！

キャンティの狙撃を皮切りに組織側の反撃が始まる

そんな日常を逸した状況下で、新一は向こうから飛び交う弾を見極めていた

そして、一発の弾丸が右のブロックの上から飛んでいることを見抜いた

「赤井さん、一人は右のブロックの上です」

「了解、B班は奴らの目を引け。D班は奴らが気を取られている隙に右のブロックの男を包囲、確保」

B班は自分達を防護しながら奴らに近づく

その影でD班の10人がひそかに回り込む

このD班はCIAで構成された班である

「よし、何発か右のブロックを狙え」

捜査官の数名が右のブロックを撃つ

『ちっ』

コルンが一瞬隙を見せた瞬間

「今すぐライフルから手を離しなさい！」

という声にコルンは振り返ると

既に自分が包囲されてることに気付く

そして、その声の主が水無怜奈だと知る

『キール……』

「悪いわね、これが本業なんです」

そういつと水無は無線で確保を伝える

2階中央で待つジンとウォッカ

「兄貴、さっきからベルモットとつながりやせんぜ」

「あいつは今頃、FBIの捜査官に化けて赤井を始末しているころ
だろうよ」

銃撃戦は続いていた

新一はもう一人のスナイパーの位置をまだ特定できない

向こうのドアの前に並ぶ組織の仲間

数名は負傷を追って倒れている

しかし、なぜかその場所から動かない

それに、ブロックにはたった一人しか隠れていなかった

奴らの狙いに惑わされていたときだった

一人の捜査官がヘルメットを狙われたのを皮切りに数名が腕などを
撃ち抜かれた

「っ！」

新一はようやく気付いたようだった

そして、叫んだ

「突進っ！」

File 18 ごめんね

一方、階段のドアに赤井らと待機する捜査官たち

その中にひそかに紛れ込んだベルモットはタイミングを見ていた

赤井は中の様子をイヤホンで聞きながらも

全く隙を見せないのだ

「突進っ！」

新一の声に捜査官は一瞬戸惑ったが、一気に奴らに向かって突進した

何人かは脚を撃たれ、倒れたが200人以上いる捜査官の突進に組織側は怯み、銃撃が止んだ

捜査官は200人がかりで奴らの仲間50人を確保

そして

「赤井さん、スナイパー確保しました」

「よし。我々も中へ入ろう」

二人のスナイパーは両手足を縄で繋がれた

この時、まだ新一たちは気付いていなかった

ドアの向こうからウォッカが覗いていたこと

そして、ウォッカが捜査官に紛れている新一に気付いてしまった

（あのガキ・・・）

「よし、A、B班はこいつらを1階へ連れていけ。そのまま見張りに付けてる」

ドアの向こうの情報を聞いたジンは笑みを浮かべた

「残るは3人・・・おそらく奴らが武装しているのはここまでだろう」

そついうと赤井は残った捜査官から銃の腕の自信のあるものを残らせ

それ以外には日本警察への連絡を命じた

そして赤井はドアを開ける

そこはただの細い通路だった

その向こうにはボロボロの木でできた扉があった

つと次の瞬間、小さな銃声を赤井は聞き逃さなかった

と同時に一人の捜査官が新一の前に入り、撃たれた

「おい、大丈夫・・・！？」

「べっベルモット・・・」

慌てる捜査官に赤井は口パクでなにかを伝えた

パンツ！

また銃声がする

しかし、こっちには弾が飛んでこなかった

「その女は君に任せた。ジンは俺が仕留める。必ずな」

赤井の強い決意の籠った視線に新一は頷いた

「くっクール・・・ガイ」

「ベルモット・・・」

「やっぱりあなたは組織のシルバートレットになってくれた・・・
みたいね」

「お前、何言つてんだ・・・？」

「あなたが俺たちを巻き込みたくなかった。
あなたがあんなに小さな姿になってるのは・・・知らなかった」

「・・・そんな話は後でじっくり聞いてやるよ、シャロン」

ベルモットは本当の名前を呼ばれると、ポケットから小さな紙を新一に握らせた

「ここにボスはいる。あなたなら大丈夫・・・」

「お前、なんでそこまで俺達を」

- A s e c r e t m a k e s a w o m a n w o m a n .

「あたしなら、大丈夫だから・・・行きなさい！」

(・・・シャロン)

「わかった。蹴りをつけに行ってくるぜ」

File 19 ジンのミス

赤井はドアを開いた

視線の先に写る黒ずくめの男

組織の中枢を担う男、コードネーム・ジン

近くに倒れているもう一人の男を見て

先程2発目の銃声の矛先を知った

「・・・久しぶりだな」

「お前が組織を裏切って以来だ」

「その男はお前が？」

「工藤新一を殺り損ねた報いだ」

「いつまでそんな馬鹿なことをするつもりだ・・・？」

ジンはポケットでベレッタを構えた

「答える必要がない。お前には宮野明美と同じ道を歩んでもらう」

というと瞬時に赤井と捜査官を撃ち抜いた

「ぐっ……」

赤井は左肩を撃たれた

「フツ、今回の件で我々の存在が世間に知れ渡ってしまったのは残念だが

お前が消えれば、次に立て直したときには敵など・・・ぐっ」

突然、ジンは何者かに腹部を狙撃される

（だっ 誰かいるのか・・・！？）

赤井は後ろを振り返った

そこにはさっき撃たれ、大量に出血したベルモットが立っていた

「べっバカね、ジン。工藤新一を・・・逃がしてしまった時点で・・・組織は崩壊したような・・・ものなのよ・・・」

そついうとベルモットは倒れた

赤井は怯んだジンにすばやく近づき、頭に銃を突き付けた

「銃を・・・捨てる！」

倉庫から少し離れた場所

ジエームズ、キャメル、ジヨディは赤井の連絡を待っていた

「わかった、連れていけ。これまで確保した組織の仲間をこれから警察に引き渡す」

「ボス、シュウから連絡は？」

「いや、まだだが」

『こちら赤井。目標確保！』

その知らせに車内は歓喜に包まれる

「何人が負傷者がいる、救急車を呼んでくれ」

ジンに銃を突き付けたまま無線で連絡をする

「さて、後はボスだな・・・」

赤井はドアの向こうに視線を送った

（後は・・・任せた。名探偵）

「
.
.
.
」

.
. .
. .
. .
. .
. .
. .

クックククククッ . . .
」

真っ暗な部屋でモニターを見ている一人の男

「やっぱり、あんたが組織のボスだったんだな」

新一は後ろからそう声を掛けた

「あんななんだろう？ボスは。こんな隠し部屋があるなんてな」

「私の趣味でね」

「人を苦しめる趣味か！？」

「君にはわからないだろう。我々のしよつとしていゝことは」

「わかりたくもねーよ」

「フッ、君は知りすぎてしまったようだ。コナンくんいや、工藤くん」

「あー。でも、テメーの組織ももう終わりだ。観念したほうがいいんじゃないのか？白鳥さん？」

File 20 君の好きな人

「あー。でも、テメーの組織ももう終わりだ。観念したほうがいいんじゃないのか？白鳥さん？」

そう呼ばれて、組織のボスがこちらを振り向く

「よくわかったものだ」

その男は白鳥警部だった

「最初に気になったのはジンが舵さんの前で思わず口走った“ワイン”っという単語
そして、高木刑事にプッシュ音とアドレスの話を聞いてあんたがク
ロだと踏んだんだ
予想通り、舵さんを殺してどこかへ逃げていたのも高木刑事に聞い
たよ」

「高木くんにそこまで聞いていたとはね
私はその時、舵を消してすぐに組織に合流する必要があった。
・・・そう、君を消すためにね」

「それで、今からどうするんだ？もう仲間は全員FBIとCIAが
捕まえた。観念し」

「君には好きな人がいるかい？」

会話が噛み合わない訳のわからないことを言つと
白鳥はため息をついた次の瞬間、声をあげる

「最後に組織を潰された腹いせとして、君の恋人には死んでもらう
！」

そついうと白鳥はボタンを取り出す

先程の言葉に呆気に取られ、新一は麻酔銃を構えるのが遅れ、ボタ
ンを押されてしまう

「蘭っ!!」

(えっ!?)

蘭は何かを感じて窓の外を見る

「ん?どした?」

「え、今誰かに呼ばれた気がして」

「気のせいじゃない？」

（でも・・・確かに今新一が・・・）

- 爆発まで後2分

その機械の声に新一は気付
きモニターに近づく

モニターはパソコンと繋がっていた

新一は無我夢中で爆発解除に努めた

- パスワードを入力してください

新一は焦りに支配された

パスワードにするようなことを思い付くほど白鳥のことを知らないのだ

その時、新一は先程の白鳥の言葉を思い出す

“君には好きな人がいるかい？”

新一は急いで6つのマスを“さとうみわこ”と埋める

パスワードが違います

新一（何っ！？）

爆発まで10秒を切っていた

つと新一は爆破タイマーになぜか目を奪われた

00:05

新一はその瞬間6つの数字をすばやく撃ち込み

パスワードを解除し、爆発を解除した！

タイマーは残り1秒で止まっていた

「こちら、工藤です。ボスを確保。
それから帝丹高校に爆弾が仕掛けられています。
すぐに爆弾処理犯を向かわせてください」

こうして、黒の組織は壊滅した

FBI捜査官の連絡で駆け付けた目暮警部らはその犯罪者の多さ
そしてその犯罪集団のリーダが白鳥ということに驚愕していた

新一を庇って撃たれたベルモットの自供でアメリカにいる組織の残党も確保されたのはこの後のことである

File 20 君の好きな人（後書き）

ワインに目がない白鳥だからコードネームがワインというのはあまりにも直球過ぎましたが、他に酒好きはおっちゃんしか浮かばなかったんで、白鳥にボスになっていたいただきました笑

File 21 おまたせ

この大々的な犯人確保劇は警察のパトカーや救急車が異常に集まったことや

近隣住民などによって広まり

さらに、FBI、CIAの極秘捜査なども影響して
世界を巻き込む大事件になった

白鳥を乗せた警察車両と共に新一は警視庁に運ばれた

車内で白鳥は新一に質問をした

“なぜ、パスワードがわかったんだい？”

新一は得意げに返した

「あなたがいった“君には好きな人がいるかい？”

あれはヒントだったんですね

僕が白鳥警部のことで知っているのは

警部が佐藤刑事のことが好きということだけ

でも焦りましたよ。“さとうみわこ”が違った時は

でも、爆破タイマーが気になったんですね

爆発まで時間がないのに

残り5秒で気付いたんです

佐藤美和子は数字にすれば“310305”になるってね

「

白鳥はどこか嬉しそうな顔をして“そうかい”と返事をした

警視庁は異常な犯罪者の数に混乱していたが、すぐに事情聴取が始まる

新一は自ら拳銃の使用を認め、法律に違反したことを認めたが
警察側は事件の巨大さや彼の解決への貢献
そしてFBIからの特別要請も踏まえ厳重注意に留めた

それから新一は警察病院へ向かう

121号の赤井の病室に入ると、
ジェームズとジョディが既に駆けつけ、赤井と何か話していた

「おー工藤くん！」

「大丈夫だったの？」

「嚴重注意だけでした」

「まあ、警察も君を捕まえるわけにはいかんだろう・・・」

新一は苦笑いした

「ところで、組織の奴らは」

「ジンは隔離病棟で20人体制で見張られているわ。
ベルモットは撃たれた箇所からの出血がひどかったみたいだけど、
彼と同じく隔離病棟に」

「ベルモットがいなければ組織の壊滅は・・・」

「ええ、彼女は探していたのかも知れませんが、僕や赤井さんのようなシルバー・ブレットを」

「じゃあ工藤くん、私が君を家に送るわ」

新一が“ではお言葉に甘えて”というと赤井が新一を呼び止めて左手を伸ばした

「全て、君のおかげだ。ありがとう」

新一はその伸ばされた手を強く握りかえした

裏道から警視庁を出た新一は警視庁前に殺到するマスコミをただぽんやり見つめた

「じゃあ、ここです」

と言って、角で降りる

そしてすっかり暮れた道を歩いた

その時、新一の瞳は思わぬ光景を捉える

それはずっと心配をかけ続けた幼馴染みが自分の家を見つめていることだった

「蘭・・・」

思わず出した声に幼馴染みは振り向く

「しっ新一っ！」

涙を流しながら駆け寄る幼馴染みを新一は受け止めた

「約束通り帰ってきたぜ」

「バカ！どれだけ待ったと思ってるのよ!!」

「悪いな・・・」

「いつも事件事件事件って！待ってるあたしの身にも・・・」

「ただいま・・・」

その言葉に蘭は怒号を止めて返した

「おかえり」

F i l e 2 1 おまたせ（後書き）

黒の組織の話はこれで終了なんですが、最後はこの二人をくつつけないといけないので、もうちょい続きます

File 22 真実

「ところで、オメーこんなところで何やってんだ？」

時刻は7時を回り、風も冷たいこの季節だが
新一はわざとらしく聞いてみた

「えっ？だつて、明日用事あるし、新一が今日帰って来てないかな
と思って」

「とりあえず寒かったろ？あがつてけよ。話したいこともあるから
よ」

この時、新一は自分がコナンであったことを話す決意をしていた

家に入り、テレビをつけると

ジエームズが組織について会見を開いている映像が放送されていた

「どの局もこればかりよ」

蘭は半ば呆れながら言った

『事件が解決したのは、我々の力ではなく
高校生探偵、工藤新一くん無しにはありえなかった！』

テレビの話に蘭は大声をあげる

「ちょっとどういふことよっ！？なんでアンタが出て来るのよ！」

「だから話あるっつつたろ？」

新一はこの事件に関わった経緯を話した

蘭は“大変だったんだね”と言った

「それだけじゃねえんだ、蘭」

そして、新一は意を決して告げる

「俺が江戸川コナンだったんだ」

蘭が驚いているのは見なくてもわかった

そして涙を流していることも

「奴らを捕まえるには、オメーの家に住むしかなかったんだ。オメーの家で奴らの情報を集めるしか・・・」

蘭は言葉が出てこない

「オメーやオメーのおじさんを騙してたことは謝る。ごめんな・・・
蘭」

重い空気が流れる

「仕方・・・ないよ」

新一は下げていた頭をあげる

「だって、そんな大事件だもん。もういいよ」

「蘭・・・」

「さっ！こんな話はおしまいっ！今日は帰るわ」

「あ、そうだ！明日、どうせ暇なら空けといてくんねえか？」

「どうせって何よ！」

目があって二人は笑った

「なんか新一がやーっつと帰って来た実感沸いて来たよ」

「俺もだ」

「っで、どー行くの？」

「米花センタービル展望レストラン・アルセーヌ」

File 23 この場所で

蘭は家に帰ると小五郎に嬉しそうに新一の帰還を伝えたが

「だーあ！今ヨーコちゃんが歌ってんだ！探偵ボウズの話は後にしろっ！」

と言って聞かなかった

蘭は少し毒づいた

しかし、小五郎は蘭の嬉しそうな後ろ姿に心の中で呟いた

（よかったな・・・）

一方、新一は阿笠博士の家に報告に訪れていた

「おお！新一っ！無事じゃったかあっ！」

「ああ、まあな」

「お手柄だったみたいね」

灰原は無表情だったが、裏に隠した感謝と祝福を新一は感じ取っていた

「どうやら、完全に元に戻れたみたいね」

「オメーのおかげだ。ありがとうな」

「よしなさいよ、お礼を言わなきゃいけないのはあたしなんだから」

灰原はフツと微笑む

すると新一の携帯がなる

「もしもし？」

「おー工藤か？俺や」

「服部・・・」

・大阪

「やー敵わんわ。お前知らん間に元戻るわ組織ぶつつぶすわ」

『オメーのおかげだよ。オメーの情報がなかったらまだ解決してねえだろうからよ』

「なっ何こそばゆいこと言いよんねん！
事件はお前が解決したようなもんやって、さっき会見で」

『一人で解決できるわけねえだろ。それにさっきのも本当の気持ちだぜ？』

「ふ、せやな。ほんならな工藤！あの姉ちゃんによろしゅう頼むわ」

「ったくよ」

「ほれ、君も疲れたじゃろ？今日はもう帰って寝たほうがええじゃろ」

「悪いな博士。そうさせてもらつたよ」

次の日、新一は昼1時に目をさます

この1週間、特に後半は寝不足が続いたこともあり深い眠りに入り込んでいた

久々のまともな睡眠で体力を取り戻すと

シャワーを浴び、歯を磨き、着て行く服を選んだ

約束まで後5時間・・・

新一はもう一度気持ちを引き締めた

・毛利家

小五郎はこの日に限って事件の捜査を理由に家を留守にした

蘭は買い物帰って初めてこのことを知る

「ちょっと！今日一人になっちゃうじゃない！」

・米花センタービル前

午後6時、待ち合わせの時間

新一はギリギリでやってくる

「セーフ！」

「残念でした！4秒遅刻！」

「こつ細けえ」

「自分で決めた時間くらい守りなさいよ」

「へいへい、さあ行こうぜ？」

展望レストラン・アルセーヌ

新一は店員に“予約していた工藤ですが”

というと前回と同じ窓際のテーブルに案内される・・・

File 24 伝説ふたび

「新一、このテーブル・・・」

「あつああ、前回の」

二人は席に座ってウェイトレスにオーダーする

「そういえば、新一単位とか大丈夫なの？今年ほとんど欠席扱いじゃ・・・」

「あゝ。それなら昨日父さんが話してくれて、特別に単位をくれるみてーだよ」

「さすが・・・お金持ち」

「それは関係ねえよ」

「でもよかった。だって、新一と同じクラスになれるかもしれないでしょ？」

ていつて微笑む蘭

新一も“そうだな”と答える

やがて頼んだ食事が届き、二人で食べる

食べながらも緊張の色をだんだん濃くする新一に蘭は“早くトイレ行って来なさいよ”とささやく

食事を終え、また二人で話す

「あ、そうだ！」

つといて蘭はかばんから何かを取り出す

「はい、今日バレンタインだから」

蘭が手渡したチョコを新一はありがたく受け取った

「なっ　なあ、蘭」

「何？」

「実は・・・」

蘭はまだわかっていないようだ

「前から、俺は・・・オメーのことが・・・」

こつこつことに鈍い蘭もようやく気付いた

「オメーのことが好きだった。世界中の誰よりも」

周りにいた年上のカップル、そして以前蘭にこの席の伝説を伝えたあのウェイトレスも
みな固唾を飲んで見守っていた・・・

「あたしも・・・あたしも新一のこと、好きだよ」

その返事を聞いた周りの人からは自然と拍手が起きる

新一と蘭はその拍手にテレながらも本心ではとてもうれしそうだった

その日の帰り

「明日は久々にトロピカルランドでもいくか？」

「うん！いいね」

「よし、じゃあここで今日はお別れだ」

「・・・」

「どした？蘭」

その時、新一は気付いた
事務所や自宅が真っ暗なこと
蘭が服の袖を掴んでいることを

「・・・一緒に寝ねえぞ！」

「隣にいただけなんだからいいじゃない？」

「ばっバーロー！」

「とにかく着替えとってくるから」

「おいっ・・・」

家に着くなり蘭は“じゃあ私ベットちゃんとしとくから新一はシャワー浴びて来てて”

新一はその言葉通りシャワーを浴びた

シャワーから上がると入れ代わるように蘭がシャワーに入った

テレビでは昨日の組織の話題を特集していた

“昨日まで、あいつらと戦ってきたんだよな・・・”

「ホント・・・大変だったね」

驚いて振り向くとまだ髪をタオルで吹きながらスウェットを着た蘭が立っていた

「ホント、夢みてーだよ」

「でも、こうして帰ってきた。夢なんかじゃないよ」

というと、蘭は新一に顔を近づけ、新一にキスをした

新一はいきなりの出来事に一っ気に真っ赤になった

「今のは・・・夢か？」

「夢なんかじゃないわよ、だって私は新一が大好きだから」

「
ああ、俺もだ」

File 25 最初の一步 (Epilogue)

月曜日

久々に着る帝丹の制服に袖を通し

新一はため息をついた

“ お前が進級するためには無遅刻・欠席0が条件だそうだ ”

昨日の父・優作の言葉が頭に浮かぶ

「ハアゝ・・・」

とまたため息をつく

その時、呼び鈴がなり、新一はかばんを持って家を出る

呼び鈴を鳴らしていたのは言っまでもなく蘭である

「行こうか？」

「めんどくせー」

といいながら欠伸する新一

「私のためだと思ってがんばってよ！平成のホームズさん？」

「しばらくホームズも休業！」

父さんが進級できるまで事件をまわさないように根回ししたみてえなんだよ・・・」

「普通の高校生活送れていいじゃない？」

「ま、メリットは蘭に毎日会えることだけだな」

「・・・バカ」

一方帝丹高校では

ニュースで工藤新一の学校復帰を待ち侘びた生徒が門の前に殺到

教師が教室で待機するように指示するほどの状況だった

そんなことを知らぬ二人

「なんか騒がしくない？」

新一は立ち止まる

「・・・」

「ちょっと聞いてる？」

新一はこの時、今日何度目かのため息をついた

「ありゃ思った以上だ・・・」

そついうと再び歩き始める

門の前はまさに空港でスターを待ち侘びるファンの混乱そのままの
状態

「おい！蘭くん！新一くん！」

園子の声で生徒はこの日一番の歓声に包まれる

“キャー！工藤先輩っ！”

“工藤くんこっち向いてっ”

“工・藤！工・藤！”

そんな歓声に目をやりながら新一は人差し指を口に近づけた

門の前は静まり返る

「蘭早く行くぞ？」

新一は新一への大歓声で俯き気味だった蘭の手をとって門にできた生徒の花道を走り抜けた

これが、工藤新一として、もう一度歩き出す
そして、蘭と二人で歩む道への最初の一步になった

File 25 最初の一步 (Epilogue) (後書き)

なんとか最終回まで持つてきました。最後までお付き合い戴けたならばありがとうございます。読み直すとDMFが絶頂期な気がしてなりません。310305は偶然気付いたんですが、やや強引ボタン押した瞬間に爆発にせず、タイマーにしたのはこれを使ったかったからです。後組織キャラがやや変わってしまったことを申し訳なく思っております。また気晴らしに書くときもぜひよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6317h/>

黒の糸口

2010年10月14日13時43分発行